

恋と眼鏡とチョコレート
Koi to Megane to Chocolate

Fukapon

「ハッピーバレンタインっ！」

威勢のよい声とともに食卓に置かれたのは、大きく丸いチョコレートケーキ。

「これ、洋子が作ったの？」

「もつちろん。服もケーキも、今年はがんばっちゃったもんね」

メイド姿の少女が誇らしげに突き出す薄い胸には、白いエプロン。所々チョコレート色。顔にまでチョコレートがくっついてい

今日という日にはそれもキュートなアクセサリーである。洋子自身も「こんなに可愛い女の子がプレゼントしているんだからね！」と自信たっぷりに臨んだこの瞬間だ。

しかし贈られた少年の反応はよくない。

「……味見、した？」

向かいに座る彼、崇は、硬い表情でケーキを見つめた後、視線を持ち上げ洋子を見つめる。訝しげに、あからさまに礼を失して苦み走った表情で。

「あんたねえ、他に言うことはないわけ？」

「いや、それ質問の答えになってないから」

「はいはい、ちゃんと味見もしたってば」

普段なら一発殴ってやろうかという流れだが、今夜の洋子は一味違う。

満面に笑みを湛えたまま、慣れぬ手つきでゆっくりと、ケーキを切り分けた。

「どうぞ、召し上がれ」

「さんきゅ。どれどれ……」

フォークを握り、ケーキを小さく崩して、口に運ぶ。

崇の一挙一動を見守ってた洋子の瞳に、ハッと目を見開く彼が

映った。

「どう？ おいしい？」

身を乗り出し、ショートヘアに乗せたヘッドドレスを揺らす彼女。

女。

果たして彼の返す答えは。

「ああ、うまい。驚いたわ」

「やたーっ」

洋子は大喜びしながらも包丁をゆっくり丁寧に置いて、胸元で小さく可愛くガツポーズ。軽やかに続けた。

「ほら見なさい、私はやればできる子なのよっ。さ、続きを言っ
てちょうだい」

カモンカモンと手で合図する洋子。

「え？ 続きって？」

疑問を口にするか崇にも今日の彼女は寛容だ。それどころか笑顔を深めてさえた。

「やだなあ、わかってるくせに。今日は何月何日？」

「二月十四日」

「何の日かなー？」

「バレンタインデーだろ？」

「そうそう、だからさ」

右人差し指を口元に添えて、くっつと顎を引いて。

小さく上目遣いを作った洋子は、女の子の戦いに決着をつけん
と言いつつ。

「好きだよーとかさ、付き合っつーとかさあ。もう何言わせんの
よう」

「いや、ないだろ。それは」

「きゃーっ、仕方ないな付き合っただけ……え？」

「ないから。俺の好きな子、洋子じゃないし」

戦い方は、闇の中に葬り去られた。

十

翌朝。真つ青な空の下、今日も洋子は呼び鈴を鳴らす。

もちろん隣の家の呼び鈴だ。

「崇、行くよー」

洋子はいつも通りに、崇を笑顔で迎えた。

「おはよ」

「お、おはよ」

崇は少々きこちなくもあつたが、洋子は極めて平常運転。

彼が気付いた、たった一つを除いて。

「今日は眼鏡なんだな」

「うん」

銀色のリムレスフレーム。眼鏡としては最も目立たないデザインにもかかわらず彼が気付いたことに、洋子は表情をふわっと柔らかなものにする。

「目が重たくて、コンタクト入れる気がしなくてさ」

「えっと、それって……」

「そりやそうだよ。好きな人にフラれたら泣いちゃうでしょ」

彼女は静かな微笑みをいたずらな笑みに変えて、言い淀む彼に代わって理由を明かす。

続いて一歩二歩と早足で彼の前に出て、くるりと振り返った。

「いいんだよ？ 今から惚れてくれても。『眼鏡にぶっつけた

い！』って理由でも許してあげる」

まばらとは言え人通りのある公道。

そんな中で少女が言い放った言葉は、彼女なりの結着だったのかも知れない。

「眼鏡っ娘もののＡＶばっかだもんね」

洋子は崇の反応を見ることなく踵を返すと、一人先に、通学路を走り出した。

崇は追いついたところで掛ける言葉が思いつかず、そのまま彼女に遅れて教室に入った。

「追いつかないあたりが、好きでもない女つてところ？」

入り口横の席には、すでに洋子が座っている。

嫌味な科白だが、声色からしてあっけらかんと笑っている。視線を向けてきた彼に、満面の笑みで彼女は言い添えた。

「今日は、崇の好きな女の子ばかりだねー」

彼は何のことやらと不思議に思う。

しかし顔を上げたとき、はたと気付いた。

「お、おいつ、みんな眼鏡掛けてるじゃねえかよ」

昨日まで眼鏡っ娘だった子はもちろんのこと、昨日までは確かに眼鏡を掛けていなかった子も軒並み、眼鏡っ娘に転向している。

眼鏡眼鏡眼鏡。

眼鏡眼鏡眼鏡眼鏡。

デレデレとにやける崇の表情を見ながら、洋子は面倒そうに口を開いた。

「崇みたいなバカな男が多いってことねー」

今度は紛う事なき嫌味と言わんばかりの棒読みである。

しかし彼は気にせず、教室中を見回していた。ジト目の彼女も気にせず喜びを口にするほどらしい。

「まったく眼鏡っ娘は最高だぜ」

「ただ一人、私を除いては」

「ああ、その通りだ」

痛々しいジョークを飛ばしながら、苦笑ともつかない笑顔を交わした。

刹那、彼の背後を通ったのだ。

「!?」

洋子はその存在に目を見開き、笑顔を失った。

彼女のあまりの変わりように、祟も気付いた。そして振り向いた。

「え、あ……」

言葉を綴ることすら許さぬ存在。

異形のもの。

それは悠然と言うにはあまりに可愛く、ひょこひょここと洋子の後ろに移動。後に、動きを止める。

計れば数秒だろう。しかし二人が数十秒にも長く感じる沈黙を経て、洋子は腰を捻り後ろを向く。そして、恐る恐る口を開いた。

「お、おはよう」

「おはよ。どうかしたの?」

少女の姿をしたそれは世界と瞳との間に何も置かぬ、現教室内唯一の存在。

向けられた稀有なる輝く瞳に、洋子は察しながらも聞いてしまった。

「ツギカ月花、眼鏡は……?」

「えっ、と、ね……」

次第に顔を紅潮させ、俯く少女こそが異形なものの正体である。洋子は然もありなんと結論に至り、改めて微笑んだ。

「おめでと」

「うん、ありがとう」

月花は見せ慣れぬ瞳を伏せたままに言葉を返す。

黙って見ていると自分まで恥ずかしくなりそうと、洋子は会話を繋げる。

「残念だったわね、眼鏡っ娘ばかりじゃ……なく……て……」

しかし繋げ方がまずかったと気付いても後の祭り。話題を振った崇に、失せた笑顔を取り戻す気配はなかった。

前と後ろで正反対の空気に挟まれた彼女。

またもや沈黙が始まらんとしたとき、割って現れたのはまたもや異形なるものだった。

「川瀬さん、いる?」

白衣を纏った女性はカラッと大声を投げる。

「は、はい」

一拍おいて消え入るように答えたのは月花である。

「あーいたいた。車に鞆を忘れていったわよ」

生徒たちの注目を浴びながら、彼女が差し出したのは学生鞆。

生真面目に教科書がたくさん入っただけで、如何にも月花の鞆だ。

「あ、ありがとうございます」

「まったくもう、しっかりしなさいよ。あら? どうしたのかしら?」

彼女は月花に鞆を手渡すと、周囲をきょろきょろ見回し疑問符を浮かべた。

沈黙の中で、にやりと聞こえてきそうな表情がいくつも彼女に向けられている。その一角を成す、洋子が彼女に答えた。

「野田先生、眼鏡はどうなさったんですか？」

「……わかっけて聞いてるわね？」

「そりやもう」

彼女の言葉に、妄想は確信を帯びる。

洋子はもう、にやにやを通り越して吹き出しそうですらあった。

「眼鏡と眼鏡をぶつけるなんて、この年になって恥ずかしかった

のよ」

「蒲魚ぶるのもいい加減に——」

「ぶつけないわよっ！」

すかさず言い返した彼女に、どつと笑いが押し寄せる。いつもと違う教室が、いつも通りの明るさを湛えた。

ただ一人、彼を除いては。

「やっぱり眼鏡っ娘が最高だぜ」

崇は天井を仰ぎ、虚空に言い放った。

あとがき

またやっちゃいました。てへぺろ。

じゃなくって、ごめんなさい。前日から書くところ、愚行、ダメだとはわかっているんですけどねえ。それでも書くかと思えるなら私も生きてるのかなってことで、許して欲しいとは思いませんけど。足りないところがいっぱいですが、とにかくリリースです。叱って叱って（違います）

やっぱりバレンタインデーはお祭りじゃないですか。一発落としたぐらいじゃ諦めたくないじゃないですか。とゆわけで、コミティア逃したけど今回書いてみました。

何となく、今やバレンタインデーに告白とかないんだろうなと思って思います。国際標準化とゆー謎めいたお題目が唱えられる昨今、そもそも告白から始まる恋人なんてゲームの中だけかなとか思います。小学校から英語とかよくないよね、うん。

眼鏡とか姫カットとか、そーゆーオンラインって小説人にはちよつと厳しいんですよ。でも今回もがんばったよ！ 実際のところ、普段眼鏡を掛けてない人が眼鏡だったり、その逆だったりすると、何か気になっちゃいますよね。ちなみに私は、画面を見るとときと、洋裁するときに眼鏡です。……近視だよ、ホントだよ。

よくわからんことしか書いてないけど、眠いからこの辺で。
私はぶつてる女の子が大好きです。

二〇一三年三月二日、大好きなものが揃わない作業場より

恋と眼鏡とチョコレート

Fukapon

2013年3月2日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか as 冬服眼鏡っ娘党
印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2013 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>
<http://www.projectkaigo.org/>

ペーパーにしたかったけどちょっと文字数が多かった

